# 「にあり」から「である」へ

佐伯梅友

「である」が出ればやがて「だ」が出るということになるが、こゝでは、その「だ」が出る前までのところを考えてみようとするのである。

いわゆる断定の助動詞「なり」が「にあり」から出ることはいうまでもないことと思うが、その連体形だけは「に存在する」意にも用いられるといわれる。けれども、そういう意味にも用いられるものは、必ずしも連体形だけではないようである。つまり、「にあり」の中に、①「に存在する」意の場合と、②「である」意の場合とがあって、②の場合の方が「なり」となるばかりでなく、①の場合の方も「なり」となると考えられるのである。②の場合の方は例をあげるにも及ぶまいと思うが、

吾妹児は久志呂爾有奈武（万、九巻一七六六）
うつせみの世の人奈礼婆（万、十七巻三九六二）

を、見合わせる一例としてあげておこう。問題は①の方であるが、

あをによし奈良爾安流伊毛我（万、十八巻四一〇七）
駿河奈流阿倍の市道に（万、三巻二八四）

などは連体形で従来も認められていたものであり、これらから、

石見爾有高角山（万、二巻一三四）

の「爾有」なども、文字のまゝなら「にある」であるが、一般には「なる」と訓まれているのである。けれども、

家有者笥に盛る飯を、草枕旅爾之有者椎の葉に盛る（万、二巻一四二）

の「家有者」は、多くの人が「家にあれば」または「家にあらば」と訓んで「なり」で訓もうとしないのは、後の「旅にしあれば」との釣合を考えたこともあろうが、一つには連体形でないからということもあるのではなかろうか。けれども私は、後の方の理由ならば、こだわる必要はないだろうと思っている。それは、次のような例があるからである。

伊弊那良婆かたちはあらむを……家さかりいます（万、五巻七九四）

これは、いるところが家ならば、というように考えれば、「である」の方になるわけだが、諸注にもそうは考えていないようであるし、後の「家さかりいます」に合わせて考えても、家にいるならばの意と考える方が落ちつきがよいであろう。

天へ行かば汝がまにまに、都智奈良婆……かくかくに欲しきまにまに、しかにはあらじか（万、五巻八〇〇）

これも前と同様で、いるところが地上ならば、という意と見れば、「である」の方になるが、やはり諸注にもそうは考えていないようである。「天へ行かば」に対しても、地上にいるならばの意と考える方が穏かであろう。

けふもかも美也故奈里世婆見まくほり西の御馬屋のとに立てらまし（万、十五巻三七七六）

この歌は、全釈には「若シ此処ガ都デアッタナラバ……」というように訳してあるが、その他の注書は、都にいるのだったら、というように意味をとっているようである。そうして私も後者によりたいと思う。

土佐日記には、次のように二種の言い方がしてある。

なほ同じ泊なり。（元日）

同じ所なり。（正月三日）

なほ同じ所にあり。（正月五日）
同じ湊にあり。（正月七日）
なほ同じ所なり。（正月八日）
なほ同じ所にあり。（正月十八日）
きのふの同じ所なり。（正月二十四日）

こうして並べてみると、「なり」の方は「である」であるとも言い切れないように思われる。更級日記の、「富士の山は此の国なり」という「なり」も、「である」ではなくて「にある」の方だと考えたい。

こうして、私は、「に存在する」意の方の「にあり」も「なり」となることを認めようとするのであるが、これは、今の問題の本筋ではない。断定の言い方の「なり」に代わって「だ」が出る前に「である」がある。その「である」の前に「にてあり」があるというわけであるから、まず、その「にて」について考えることにする。

ところで、この「にて」にも、①「にあって」、②「であって」、の二つの場合があると考えられる。これは「にあり」の場合に見合わせて当然なことであろう。

京師爾而たが手本をか吾が枕かむ（万、三巻四三九）
家爾底母たゆたふ命（万、十七巻三八九六）

これらは①の例である。

常にもがもな、常処女煮手（万、一巻二一）

これは②の例である。古今集でも

くらぶ山にてよめる（春上三九題）
山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ（雑下九五六）

こういう①の例は、題詞にはことに多く出るが、次のように②の例もある。

真静法師の、導師にて言へりけることを、（巻二、五五六題）

蔵人の頭にて夜昼なれつかうまつりけるを（哀傷八四七題）

さらに、次の例などになると、②の例からまたちょっと趣きが変わっていると見られるだろう。

昔の手にてこの歌をなむ書きつけたりける。（哀傷八五七題）

ところで、この「て」は助詞であるにしても、元来が助動詞「つ」から出たとすれば、もともと「つ」のつかない「に」に、助詞となったからついたというようには考えられない。それで、私は、「にて」になる前の形として「にして」を考えようと思う。

家爾之氏われは恋ひむな（万、七巻一一七九）

此間爾之氏そがひに見ゆる（万、十九巻四二〇七）

吉之嫗爾為而也かくばかり恋に沈まむ（万、二巻一二九）

「遠くて」「かくて」なども、「遠くして」「かくして」から出たものと考える。平安時代の「で」のもとの「ずて」も、「ずして」から出たと考える。もちろん、これらの「し」の下に自由に「つ」がつくわけではないが、「て」のつくためにはもと〳〵動詞から出た「し」をおく方が自然だと思うのである。

鶴洲に立てりといふことを題にてよませたまひける（古、雑上九一九題）

のようなのは、

竜田川錦おりかく、神無月時雨の雨をたてぬきにして（古、冬三一四）

というような言い方から出たとすると、この「し」は元来の変格活用の動詞「す」の意味が失われていない点で、その前にあげた例と違うようにも見えるが、私は、「し」を落していう言い方がこゝまで及んだものと考える。

月夜に「梅の花を折りて」と人のいひければ、折るとてよめる（古、春上四〇題）

のような「とて」も、

盧舎那仏作奉止為与、天にます神地にます祇をいのり奉り（一三詔）

その家門たつべしや止為奈母、このたびの罪ゆるしたまふ（二〇詔）

などの「として」から出たものと考える。

さて、こうして、「にして」から「にて」が出、上にあげたようないろ〳〵な意味があるわけであるが、この「にて」に、「あり」につづく用法が出るのである。（「あり」の意である「おはします」や「侍り」でも同じことである。）

昔見たまへし女房の尼にて侍る東山の辺に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者のみづはぐみて住みはべるなり。（源、夕顔、対校一四三ページ）

なくなった夕顔の始末について、惟光が意見を述べているところであるが、「にて侍る」と「に侍りし」と二様の言い方が出ている。「である」の意に「に侍り」は普通である。それに対して「にて侍り」の方は、違った意味をもつのではあるまいか。すなわち、「乳母に侍りし」は乳母であったの意だが、「尼にて侍る」は尼であるの意ではなくて、尼であって、そうして、いるという言い方で、わかり易く言えば、尼という状態でいる、という意なのだろうと考える。

御むすめ、后におはします、また、まだしくても姫君などきこゆるに、御書の使とてまゐりたれば、（枕、めでたきもの、朝日一八二ページ）

これも、后という資格でおいでになるという意に見られる。こういうことは、

かの老人、召し出でてあひたまへり。姫君の御後見にてさぶらはせたまふ弁の君とぞいひける。（源、橋姫、対校三八ページ）

博士の才あるは……御書の師にてさぶらふは、うらやましくめでたしとこそおぼゆれ。（枕、めでたきもの、朝日一八三ページ）

これらの用法を見ても考えられる。

左の大殿がたの人知るすぢにてあり。（枕、殿などのおはしまさで後、朝日二五六ページ）

という例になると、「である」の意に近いとも言えるようだが、それでも、上にあげた諸例にあわせて考えられないでもない。とにかく私は、「にてあり」の出はじめは、上に述べたような意味であって、「にあり」とは違う意味であったと考える。そうして、源氏や枕に出てくる「にてあり」式の言い方は大体この意味であると言えるように思う。

その「にてあり」が、とう〳〵「にあり」と違わないような用法になってくる。そうして「である」が出てくると考える。

その時の御摂籙は松殿にてぞまし〳〵ける。（平家巻一、殿下の乗合）
言語道断の事どもにてぞ候ひける。（同上、鵜川合戦）
その儀にては候はねども、入道殿の御著背長を召され候ふ上は……（同巻二、教訓）
その儀では候はず、一向当家の御上とこそ承り候へ。（同上、西光が斬られ）
幸はただ先世の生まれつきでこそあんなれとて、（同巻一、妓王）

右は流布本からの例であるが、これらの言い方については、山田博士の「平家物語につきての研究」にもこま〴〵と論じられている。こうして、やがて「ちや」や「だ」が出ることになるのである。

私は、国語を新古の二つに分けた場合に、「なり」「けり」「たり」など「り」で言い切るのを古い方の特徴とし、それがなくなってきて新しい方になると見ることができるかと思うのであるが、「にてあり」の意味が変わって「である」が出るというところを、そういう意味で注意すべきではないかと考えている。それで、非常におおざっぱな論ではあるが、ここでは、そう進んで行く経過について考えてみようとしたのである。

これは去る五月十二日の国語学会の公開講演会での講演の内容をまとめたものである。講演の時は、小島氏の前座という意味で、軽い気持でやったのであるが、雑誌に出すものとして書くように求められてやってみると、どうも恥ずかしい内容である。しかし今さらもうしかたがない。おゆるしを願うばかりである。（八月五日）

—東京教育大学教授—